

ネタバレ注意！  
エヴァ新劇場版Q  
～福音～

比良岡美紀

2012年12月



# 目次

序文	1
序と破とQ	2
なぜ十四年経っているのか？	4
葛城ミサトはなぜネルフ（碓ゲンドウ）とたもとを分かったのか？	5
カヲルとシンジの関係は？	7
マリとは何者なのか？	9
綾波レイと綾波ユイ	12
黙示文学としてのエヴァンゲリオン新劇場版	14
死海文書と外典（1） 八、九、十三について	16
死海文書と外典（2） 一、二、三、六について	19
使徒とエヴァンゲリオン	22
今後の展望など（1） ゲンドウとリリスを中心に	25
今後の展望など（2） マリふたたび&カヲルの「時」について	27
今後の展望など（3） ミサトと父	30
まとめ。ファンタジーとしての『エヴァンゲリオン』	31
参考文献	33
おわりに	34



## 序文

\*以下の文章は、11月20日に書いたものです。12月に入り改稿したため削除しましたが、このたび再掲載することとしました。新劇場版：Qについての文章と合わせてご覧いただければ幸いです。

~~~~~  
~~~~~

2011年3月11日の震災を経て、シェルターへの避難は日常となりました。震災の日はもちろんですが、その後も自然災害により首都圏でも帰宅困難者が発生。交通機関がストップして足止めを食らい、シェルターへの避難を余儀なくされる人が続出しました。人間の力ではどうにもならないものが襲来し、逃れるためにシェルターを求める。新劇場版の序と破で描かれた場面は、現実となったのです。

このことは、Qの製作に少なからず影響を与えたと思われます。同じ場面を使うことは、現実をなぞることを意味するからです。もうひとつ影響を与えた要因があるとすれば、観客の期待でしょうか。震災を経た日本人はエヴァンゲリヲンの新たな物語に期待を抱きました。観客全員が身を乗り出し、共感しようと待ち構えている。そんな状態のなか、公開の日を迎えたのです。

肩すかしをくらった気分になっている人も多いことでしょう。この作品は事前の予想の「ななめ上」をいくものでした。こうなると予想できた人は、一人もいないのではないかと。そう思えるほど、誰の予想をも裏切っているかもしれません。しかし同時に、さらなる期待を呼び起こします。物語の終局へ向け、どんな風に観客を導いてくれるのか。今から楽しみで仕方ありません。

Qを見て、いろいろなことが分かりました。さまざまなピースがつながってきています。つまり、とても分かりやすい作品なのです。序と破で出てきたセリフも、なるほどと思わせるものがあります。

どうか、できるだけ多くの人に劇場で見てもらいたいと願います。同時上映の「巨神兵東京に現わる劇場版」も、ぜひ見ていただきたいです。特撮博物館でも上映されましたが、〈特撮〉の文脈で見ると、〈エヴァ〉の文脈で見るとは違います。事実、特撮博物館で見たときよりも、胸に迫るものがありました。

~~~~~  
~~~~~

2012年12月23日

比良岡美紀

## 序と破とQ

新劇場版のシリーズは序で始まり、次が破。そしてQである。二作目が破と分かった時点で、「序・破・急」を連想した方も多いただろう。日本音楽ならびに芸能における形式上の三区分別であり、文章の三段構成を指す概念としても用いられる。起承転結にあてはめれば、序が起承、破が転、そして急が結に相当する。しかし新劇場版の三作目は、急ではなくQだ。しかも全体で四部構成になり、四作目はおそらく物語の結末を描くものと思われる。

唐突だが、新世紀エヴァンゲリオン（およびエヴァンゲリオン新劇場版）と宇宙戦艦ヤマト、そして機動戦士ガンダムについて考えてみたい。この三作はそれぞれ異なっている。何を今さら、と思われるだろうが、まず宇宙戦艦ヤマト（以下ヤマト）は戦記ものだ。それも勝者の視点からで、「どのように勝利をおさめたか」という視点で書いている印象がある。機動戦士ガンダム（以下ガンダム）はヤマトと比べると視点が相対化されており、両軍についてほぼ均等に描かれている。しかし作者の視点、あるいは主観のようなものも感じられるため、歴史小説あるいはサーガ（叙事小説）と言えよう。一年戦争だけでなく時代や世代を超えて物語が展開しており、その意味でもサーガと言えよう。

エヴァンゲリオンは叙事詩である。神と人間との物語であり、始まりから終末までが語られる。その際、出来事だけが淡々と語られ、作者の主観が入りこむ余地はきわめて少ない。実際、登場人物の主観は描かれているが、作者の主観は排除されている。またヤマト、ガンダムと同様、戦争を描いているが、勝者は存在せず、両軍を均等に描く視点もない。それは事後に振り返って書いているのではなく、「今、目の前で起こっている戦争」だからだ。

Qでも戦争は続いている。使徒はあいかわらず襲ってくるし、ネルフとヴィーレというふたつの組織が存在する。使徒との戦争に加え、人間同士の戦争も加わった。派手にやりあう戦争ではないかもしれないが、それだけに厄介な戦いだ。どちらも「神」あるいは「神的な存在」をかかえている。ヴィーレには初号機と、綾波ユイとレイ。ネルフにはゼーレとカヲル、そして碇シンジ。どちらの神が正しいのか。どちらの側に正義があるのか。複数の神が相対化され、異端と正統はいまだ定まっていない。

エヴァンゲリオンは叙事詩だ、と上に述べた。同時に神話であり、ファンタジーでもある。アーシュラ・K・ル＝グウィンによれば、ファンタジーの根本は「神話、伝説、宗教

的なたとえ話、ある民族が何者であるかを教える文学などにある」(『いまファンタジーにできること』177 ページ)。エヴァンゲリヲンの物語は神話であり、伝説でもある。また人間とは何か、混迷の時代にどう生きるべきなのか、そうしたことを教えてくれるものでもある。

ファンタジーは善悪の戦いを描くもの、そう広く理解されているが、ル＝グウィンによれば、正しくは善と悪について、それが何であるかを描くものだ。たしかにエヴァンゲリヲンの物語で価値は相対化されており、善と悪があらかじめ決まっているわけではない。2001年の米同時多発テロ(いわゆる「9.11」)以降、すべての価値は相対化され、何が正しくて何が間違っているのか、正義はどこにあるのか、誰もが模索しなければならなくなった。そんな時代に、「エヴァンゲリヲン新劇場版」は世界に向け、正義を、大義を問うている。その意味でも、壮大なファンタジーと言えるのではないか。また終末を描いている点で、黙示文学とも言える。これについては、項を改めて考えることにしたい。

ここで扱う項については以下のとおりである。

まずは新劇場版：Qで問題となりそうな五つの点について考えてみたい。

- 1、なぜ十四年経っているのか？
- 2、葛城ミサトはなぜネルフ(碇ゲンドウ)とたもとを分かったのか？
- 3、カヲルとシンジの関係は？
- 4、マリとは何者なのか？
- 5、綾波レイと綾波ユイ

そののち、次のような順序で考えて行きたい。

- 6、黙示文学について
- 7 & 8 死海文書と外典、数の意味するところ(八、九、十三&一、二、三、六)
- 9 使徒とエヴァンゲリオン
- 10 今後の展望など(1) ゲンドウとリリス
- 11 今後の展望など(2) マリ&カヲル
- 12 今後の展望など(3) ミサトと父
- 13 まとめ。ファンタジーとしての『エヴァンゲリオン』
- 14 参考文献
- 15 おわりに

(#以上、15まで2013年3月18日に完成しました。とりあえずはこれで終わりです)

## なぜ十四年経っているのか？

テレビ版から一貫して、エヴァンゲリヲンの物語は旧約聖書と新約聖書をモチーフにしている。「NEON GENESIS」という言葉からも見てとれる。NEONは「新しい」、GENESISは「創世記」。つまり創世記をやり直し、新しい世界を創ろうとしているのだ。旧劇場版では、アスカとシンジが荒廃した世界に残された。それは二人で新しい世界を創るのだという、宣言にも似たものであった。

聖書について、簡単に触れておきたい。創世記のおさめられている旧約聖書は、キリスト教では新約聖書と同様、正典である。旧約・新約というときの約は契約の意味で、それぞれ古い契約、新しい契約を意味する。古い契約は、ノアの洪水のあと、イスラエルの祖アブラハムが神と結んだ契約であり、新しい契約は、イエス・キリストをとおして神と人間のあいだに結ばれる契約だ。アブラハムの契約はユダヤ人との契約であり、ユダヤ人を通してほかの民族も救済する。それに対し神は自分の子であるイエス・キリストをつかわして人間を救済する、というのが新約聖書の考え方だ。どちらも同じ神である。

創世記の中にノアの洪水の話がある。神が洪水を起こそうと決めるが、ノアとその家族だけは救おうとする話だ。神はノアに、ほかの生き物たちもつがいで載せるよう指示する。そして洪水が起こり世界は滅びたが、箱舟に乗ったものは助かり新たな世界を築いた。アブラハムと神が契約を結んだのは、洪水のあとである。この洪水は、セカンドインパクトのイメージと重なる。セカンドインパクトのあとに生まれた子供たちが十四歳になったとき、使徒との戦いが始まる。物語の最初から、十四という数字が示されていた。Qの物語は、十四年後でなければならなかったのだ。

「Q資料」という言葉をご存じだろうか。イエス・キリストの語録資料であり、新約聖書中、マタイおよびルカの福音書はこれを参考にしたと言われている（マルコの福音書にも拠っている）。このことに気づき、マタイの福音書を開いてみた。冒頭にイエス・キリストの系譜が書かれており、最後に次の記述がある。「こうして、全部合わせると、アブラハムからダビデまで十四代、ダビデからバビロンへの移住まで十四代、バビロンへ移されてからキリストまでが十四代である」（マタイ 1.17）。十四年という数字はここから来たのではないか。そしてタイトルのQも、Q資料を暗に示すことで、物語の核となる旧・新約聖書へ観客の目を向けさせようとした、そう思えてならないのだ。

バビロンへ移されるというのは、バビロン捕囚のことだ。イスラエルが南北に分裂し、北イスラエルの滅亡後、南ユダ王国も滅んだ。南ユダ滅亡の際、人々はバビロニアへ連れ去られた。これがバビロン捕囚である。

Qではヴンダーの中に初号機が囚われており、バビロン捕囚のイメージと重なる。だとすると、契約はセカンドインパクトのときに交わされたことになる。だが、セカンドイ



ンパクトより前に契約が交わされていたらどうだろう。アブラハムからの十四代はセカンドインパクトまでとなり、そのあとダビデの時代が始まる。ダビデは神に愛され、ダビデの治世は神との蜜月であった。セカンドインパクト後の十四年もネルフとゼーレの蜜月であり、その翌年から使徒との戦いが始まる。

バビロン捕囚は人々が神にそむき、イスラエルが分裂したことを遠因とする。碓ゲンドウはゼーレにそむき、別のシナリオを用意した。それがネルフ内で不信や憶測を生み、ヴィーレが誕生したのではないか。破からQに至るまでの十四年が、バビロン捕囚なのではないだろうか。

## 葛城ミサトはなぜネルフ（碓ゲンドウ）とたもとを分かったのか？

新劇場版：破でミサトは、ネルフが何を企んでいるのかと加持に詰め寄る。おそらくここで何らかの情報がミサトに示された。そう考えるのが妥当だろう。

新劇場版：序で、ミサトがシンジを連れてセントラルドグマへ行き、自分たちも一緒に戦っている、という趣旨のことを告げる。このときは、ミサトはゲンドウに不信を抱いていなかっただろう。その意味で、人々の心はひとつになっていた。しかしQでは、ミサトはヴィーレという組織の長であり、ヴィーレにとってシンジは敵である。

神と契約を交わしたアブラハムは、ミサトの父だ。ミサトはアブラハムの子、イサク。アブラハムとイサクから続く系譜は、イエス・キリストへと連なる。しかしイエス・キリストは、ユダヤ人に迫害された。Qでも同様のことが起こる。シンジはイエス・キリストになぞらえられているのではないか。

人々の心が神から離れ、バビロン捕囚が起きた。当時バビロニアの王はネブカドネザル二世であった。バビロン捕囚が終わり、バビロニアから出られるようになって、神との約束の地、イスラエルへ帰らなかったユダヤ人は大勢いる。もちろん帰ったユダヤ人もいるのだが、彼らは離れて暮らすようになり、これがディアスポラ（ユダヤ人の離散）の始まりだと言われている。Qで描かれているのも、おそらくはそのことだろう。ゲンドウと冬月はネルフに戻ったが、ミサトたちは戻らなかった。ミサトのひきいるヴィーレはシンジにつらくあたる。しかし、ミサトは心からシンジを敵視していたわけではない。その証拠に、シンジの命と引き換えに人類を守ると言いながら、遠く離れ操作ができなくなるまで待っていた。いったい何があったのだろう。

バビロン捕囚当時、バビロニアの王はネブカドネザル二世であった、と上に述べた。

「ネブカドネザルの鍵」について、新劇場版：破で碓ゲンドウが言及している。この鍵に

よってネルフ内部に不協和音が生じ、ミサトのゲンドウへの不信も引き起こされたのではないか。ゲンドウが何を考えているのか、何のためにシンジにつらくあたるのか、それを確かめるために、加持から情報を得ようとしたのかもしれない。そこで得られた情報は、シンジをキリストに仕立てて肉体の死をもたらし、エヴァンゲリオンの中で復活させる（＝永遠の命を得させる）ことだったのだろう。旧劇場版の中で冬月に対し、シンジの母が語っているとおりだ。

ついでに言えば、サードインパクトをシンジが引き起こしたというのも、事実かどうか疑わしい。たしかに映画の冒頭で使徒をせん滅していたが、それはシンジの力というよりは、綾波レイ、あるいはシンジの母、ユイによるものだったのではないか。いわれのない罪を着せられるのは、イエス・キリストに重なる。イエスを磔にしたピラト自身、この男には何の罪も認められないと言っているが、ユダヤ人が強く求めるので、仕方なく罰を与えた。犯していない罪のためにイエスは死に、のちに復活した。ゲンドウはシンジとイエスを重ね合わせ、シンジの死とその後訪れる復活（＝永遠の命）によって、人類の救済を行なおうとしている。それを知ったミサトがネルフから離れ、ゲンドウを止めようとしているのではないか。

ミサトの父が交わした契約は、具体的に示されていないが、キリスト教の神と交わしたものではない。創世記には洪水のあと、ノアと息子たちに対し、神が約束する場面がある。「わたしがあなたたちと契約を立てたならば、二度と洪水によって肉なるものがごとく滅ぼされることはなく、洪水が起こって地を滅ぼすことも決してない」（創世記9.11）ノアとその子孫たちと契約を結び、その契約によって二度と滅ぼさない、そう約束しているのだ。キリスト教では、ノアの話がおさめられている旧約聖書の神と、新約聖書の神は同一である。

ではいったいどの神と契約したのか。あるいは神ではないのか。たしかに悪魔かもしれない。ソロモン七十二柱の悪魔の中に、セーレ（セアルとも表記）という悪魔が存在する。しかしセーレは序列第七十位で、善良な性格とある。だからこそ召喚者の願いをかなえてくれるのかもしれないが、エヴァンゲリオン物語では、ゲンドウの目的とゼーレの目的は表面的に一致していた。つまりゼーレにも目論見があったということだ。

ならば、と考えていくと、初期キリスト教で異端とされたグノーシスに行きあたる。グノーシスの思想では、旧約の神は愚かな創造神であり、イエス・キリストをつかわしたのはその遥か上に位置する至高神とされている。ゼーレは至高神であり、創造神によってつくられた世界を変えようとしているのだ。

ミサトの父が交わした契約をゲンドウが引きつぎ、神との蜜月を経験したが、ネルフ本部内でも不信が生まれ、またゲンドウもゼーレから離反する。ここまで、アブラハムから、バビロン捕囚までの二十八代と重なっている。Qではシンジが試練にさらされる。これを上回る、さらなる受難が、シンジを待っているのかもしれない。

## カヲルとシンジの関係は？

カヲルは今回のQにおいて、重要な役どころである。破の結末からQの冒頭に向け「待っていた」という趣旨の発言をしており、(破の最後で) Mark06 の頭上には天使の輪が浮かんでいる。

シンジと二人で十三号機に乗り、槍をとりに行ったカヲルは、途中で考えごとを始めた。二本の槍がどちらもカシウスの槍だと気づき、「そういうことだったのか」とつぶやいて消える。カシウスというのはロンギヌスのことで、イエスが十字架にかけられたあと、死んでいるかどうかを確かめるために槍で刺したとされる。

消える前にカヲルは重要な言葉を言う。「第一の使徒」と「十三番目の使徒」だ。第一の使徒であった自分が十三番目の使徒になってしまった、そういう発言だった。十三番目と聞いて、イエスを裏切ったユダを思い浮かべた方も多いただろう。ユダがイエスを裏切り、イエスは十字架にかけられて死んだ。シンジの脇腹に、槍の衝撃が走ったのはそのためだ。イエスは死後に復活した。同様にシンジを復活させることがゲンドウの目論見だろう。しかし肉体を復活させるのではない。シンジに永遠の命を得させることが、目的なのではないか。カヲルはゲンドウに嵌められ、裏切り者の汚名を着せられて消えた。

テレビ版で、カヲルは使徒だった。自分か、シンジたち人類か、どちらかしか生き残れない。そう言ってシンジに自分を殺すように言う。テレビ版でも、カヲルはゼーレから送り込まれていた。彼は新たな人類となる可能性を帯びてやってきたのではないか。どちらかしか生き残れないという言葉にそれが現れている。カヲルはシンジを生き残らせることを選び、そして消えた。しかし本当の意味で消えたわけではない。

前項で触れたグノーシスは、基本的に肉体と霊の二元論をとる。魂は肉体に宿るが、霊によって生きられる。霊は至高神の一部である。非常に大ざっぱな言い方をすれば、至高神のかけらが天界から下界へ落ち、人間の中に入った。そのため肉体の死は終わりではない。肉体がなくなると霊本来の姿に戻り、至高神のもとへ還る。グノーシスはギリシャ語で「知識、知ること」を意味するが、何を知ることかといえば、自分の中に神、つまり神性があること。それを知ることが、人間にとっての救済なのだ。

イエス・キリストも霊として送り込まれ、死んで至高神のもとへ還る。その手助けをしたのがユダだ。グノーシス主義の文献「ユダの福音書」でユダは、イエスの最大の理解者として描かれる。なぜかといえば、イエスが至高神のもとへ戻る手助けをしたからだ。イエスはユダに、十三番目の精霊と呼びかける。また別の個所では、ほかの弟子たちから見下されていたユダが、彼らの上に君臨し第一の弟子となることが言及されている。「ユダの福音書」においてユダとイエスは、正典の新約聖書と正反対の描かれ方をしているのだ。

テレビ版でも新劇場版でも、カヲルの消滅は、死ぬことを意味しているようには思われない。もといたところへ還るだけなのだとしたら、「また会える」と言ったのも納得できる。

「第一の使徒」はアダムを指すのだろう。アダムは最初の間でもあり、キリスト（救世主）でもある。新約聖書「コリントの信徒への手紙」の中で、パウロは最初の人アダムが自然の命を持つと述べたあと、「最後のアダムは命を与える霊となった」とつづけている（15.45）。最後のアダムとは、キリストのことだ。最初のアダムが地に属し、地からつくられたのに対し、第二のアダム（＝最後のアダム）は天に属している。『原典ユダの福音書』によれば、霊性を持つ限られた人間に対し、それを知らせる人物が必要である。それがキリストなのだ。

新劇場版：Qにおいて、カヲルはシンジを導いていた。ピアノの連弾をしたり、サードインパクトについて教えたり、冬月が懸念を口にするほど、シンジとカヲルはつながりを深めて行った。では、カヲルはキリストなのだろうか。ある面では、たしかにそうだと言える。しかし、それだけではないだろう。カヲルはシンジを「待っていた」。シンジを待っていた、ということは、シンジがキリストである可能性を示唆する。では、カヲルは何なのだろう。ひとつの可能性として、洗礼者ヨハネが挙げられる。

ヨハネはイエスに洗礼を授けた。洗礼を授けるということは、教え導くことでもある。彼はイエスについて、自分よりあとに来る、自分よりすぐれた人だ、と人々に告げる。預言者イザヤによれば、ヨハネは救世主の到来を告げる者である。それゆえ東方正教会では神の先触れの使者、前駆者などと言われ、地上に生まれた天使として崇拜された。正教会の影響下で描かれた絵画では、ヨハネは天使の輪と羽を持っている。さらに、ヨハネはヘロデに首をはねられている。カヲルはシンジの拘束具を自分の首につけ、あたかも斬首されたかのように消えた。このことは、カヲルがユダであることをも意味する。新約聖書のマタイによる福音書では、イエスを裏切ったあと、ユダは首をつって死ぬからだ。

ここで、もうひとつの可能性に触れておこう。カヲルはシンジと兄弟関係にある、というものだ。

新劇場版：破で、冬月とゲンドウが月へ視察に赴いた際、カヲルが「はじめまして、お父さん」と言っていた。二人のうちどちらに向けられたか、明らかにされていないが、ゲンドウに向かって言ったのであれば、シンジとカヲルは兄弟である。シンジを待っていたのであるから、カヲルは兄なのだろう。洗礼者ヨハネの母エリサベトは、イエスの母マリアと親類同士だという記述があり（新約聖書、「ルカによる福音書」を参照）、マリアがエリサベトを訪ね、挨拶を述べたとき、エリサベトの胎内にいる子（つまりヨハネ）がおどった。カヲルにとって、シンジの存在は喜ぶべきことであり、シンジを傷つけるつもりはないのだろう。だからこそカヲルは、これはきみが望んだことじゃなかったね、とシンジに言うのだ。

グノーシスの考え方では、人間は霊（＝至高神の一部）を持っており、それに気づくことが救済だ。しかしすべての人間が霊性を帯びるわけではない。物語の中で霊性を帯びているのは、綾波レイ、式波・アスカ・ラングレー、碓シンジ、渚カヲルと、おそらく真希波・マリ・イラストリアスだ。テレビ版ではトウジもパイロットに選ばれていたが、

新劇場版ではトウジは戦わない。エヴァンゲリオンに乗ることができるのは限られた人間、そういうことではないだろうか。

その限られた人間は霊性を持っている。パイロットがエヴァンゲリオンとシンクロして一体となるのが、自身の霊性に気づく手段なのだ。もっと言えば、エヴァンゲリオンの中で肉体を超越し、自分の意識との境界がなくなること、つまり両者が渾然一体となることが、自分の本質に気づき、救済すなわち永遠の命を得る手段なのである。

破ではこれが実現されたかに見えた。プラグ深度という言葉で表現されていたが、あまりに深くまで行ってしまうと、戻れなくなる。リツコは人に戻れなくなる、と言っていた。その意味は、人としての肉体を捨て、エヴァンゲリオンと完全に同化するという事ではないか。

肉体を超越した存在。それはイエス・キリストを意味する。物質世界に毒されず、偽りの知恵に汚されていない、純真無垢な存在だ。自由に消えたり現れたりできるカヲルは、やはり本来イエス・キリストの役割を持っていたのだろう。いっぽうゲンドウにとってカヲルは、シンジを肉体の死へと導く存在だった。だからユダに仕立てあげた。カシウスの槍が脇腹に刺さり、シンジはダメージを受けたが、死んではない。それはカヲルのおかげであり、ミサトのおかげでもあるのだろう。

ミサトと、パイロットたちとの共通点がある。それは十四年経っているにもかかわらず、年をとっているようにみえないことだ。アスカはQ冒頭で、エヴァの呪縛と言っていた。身体が十四歳のまま成長しないというのだ。綾波レイも成長しないし、シンジも成長していない。ミサトも、顔を見せないようにしていたが、十四年の歳月が刻まれているようには見えない。もちろんカヲルも同様だ。彼らは肉体を超越した存在なのだ。カヲルの役割は、人間であるシンジに自身の本性（霊性）を気づかせることなのだろう。

「ユダの福音書」では、それはキリストの役割だ。ゼーレに送り込まれたとき、カヲルはキリストだったかもしれないが、同時に洗礼者ヨハネでもあった。グノーシス主義の文献『トマスによる福音書』では、ヨハネは人間のうちもっともすぐれた存在として高く評価されている（「女の産んだ者の中で、バプテスマのヨハネより大いなる者はいない」192ページ）。兄としてシンジを愛し、シンジの望むようにしてあげたい。カヲルはそう願っているのだ。

## マリとは何者なのか？

マリは新劇場版：破で初めて登場したキャラクターである。真希波・マリ・イラストリアスというのがその名前だ。イラストリアスとはイギリス海軍の空母である。この単語

(illustrious) の古い用法には、a : shining brightly with light. b : clearly evident. の二種類がある。a は光とともに（こうごうしく）輝くという意味で b は 明らかに分かるという意味だ。語源は to give glory to, shine upon（～に栄光を与える、～を照らす）という意味のラテン語である。〈注：メリアムウェブスターオンライン、およびフリーオンラインインデクシヨナリーによる〉

彼女が何者で何を目的としているのか、作中で明らかにされてはいない。しかし破で登場したとき、いくつかヒントを残しており、Qにもヒントがある。

まず破では、自分の目的のために大人を巻き込むのは気おくれする、と発言している。使徒をせん滅し、なおかつエヴァンゲリオンを破壊した。また初見で二号機を操縦し、裏コードのビーストモードをいとも簡単に出現させた。Qでアスカに援護の遅れを指摘された際、速すぎると答えているし、シンジのことは一貫して「ネルフのワンコくん」と呼び、Qではゲンドウを「ゲンドウくん」と言う。フォースインパクトを未然に防いだときも、どうなるか見てみたい、という趣旨の発言をした。いっぽうで、シンジの援護に来た九号機を足止めした。また、ヴィーレと行動をともにしながらも、一線を画しているようだった。

エヴァンゲリオンを破壊すること。それがマリの目的だ。破で登場するとすぐに、加持との共闘で五号機を破壊した。その後、使徒にのみこまれた零号機、封印された初号機を除き、Qで生まれ変わった二号機を含め、ほぼすべてのエヴァンゲリオンが破壊された。マリはなぜ破壊するのか。それを考える前に、シンジの母、ユイがうつっていた写真について考えてみたい。冬月がシンジに見せたあの写真には、マリがうつっていた（少なくともそのように見えた）。ある一時期ゲンドウたちと関係があり、しかもエヴァンゲリオンの開発にかかわっていた。そう考えるのが妥当ではないか。

つまり、マリはエヴァンゲリオンの開発にかかわり、なおかつ破壊してまわっているのだ。Qでもヴィーレと共闘して破壊する。何らかの理由により、その存在が不適切なのだ。エヴァンゲリオンは使徒せん滅に必要だったが、ヴンダーの登場により無くても勝てると証明できた。永遠の命を得るためには必要だが、これはゲンドウの考えだ。では、マリは何を考えているのか。

おそらく、マリは「ソフィア（知恵）」である。グノーシスの思想では「墮落しがち」という位置づけをされている。ソフィアは天界におり、至高神から生まれた存在であった。しかし好奇心から、見てはならない至高神を見たいと願い、それが原因で天界から落下しそうになる。幸い落下せずに済んだものの、ソフィアの行いにより天界の秩序は乱れ、神の一部（かけら）が下界へ流出する。ソフィアの子は創造神。創造神が人間をつくったのも、元はといえばソフィアのせいなのだ。

どうなるか見てみたい、というマリの発言からは、ソフィア的好奇心が伝わってくる。人類救済のためエヴァンゲリオン開発にかかわったが、やり直そうとしているのかもしれない。開発にかかわったことを後悔しているか、あるいは乱れた秩序を回復する使命を負っているか。

ヘレニズムの影響を色濃く受けた時代のユダヤ思想でも、ソフィアは神のエージェント、神からつかわされた存在だ。ヘレニズムはギリシャ人の祖に由来する言葉で、ギリシャ・ローマ文化のギリシャ的要素を意味する。上のソフィアについての話は流出説といわれ

る。ヴァレンティノス派、セツ派などに存在し、万物は一者から流出したとする、新プラトン主義（ネオプラトニズム）の影響が見てとれる。

グノーシス主義はギリシャ起源の思想と、オリエントの思想が結びついて形成された。オリエント地域のうちメソポタミア（現在のシリア、イラク）で広く見られた流出説を西方グノーシス主義、ペルシア（現在のイラン）で見られた善悪二元論を東方グノーシス主義としている。エジプトのアレクサンドリアは、グノーシス主義が大きく花開いた場所であった。

対するユダヤ思想はヘブライズムとよばれ、ユダヤ人／ヘブライ人／ユダヤ教風文化を意味する。ソフィアが神のエージェントとして登場するのはヘレニズムの影響で、一者、つまり神からつかわされたと考えるためだろう。この神は、グノーシス主義で否定される創造神だ。

ユダヤ教には、大きく分けて三つの派が存在した。サドカイ派、ファリサイ派、エッセネ派である。サドカイ派は神殿祭司をつとめており、ヘレニズムにも柔軟だった。ファリサイ派は律法を重視し、異教の神ではなくユダヤ（イスラエル）の神を重視するよう説いていた。エッセネ派は断定には至っていないものの、死海文書が見つかったクムラン洞窟で集団生活を送っていたとされる。神殿が壊されバビロンへ連れて行かれると、サドカイ派は力を失い、ファリサイ派が主流となった。バビロン捕囚のあと、ファリサイ派はイスラエルに戻らず、エッセネ派は一度戻ったが離反して、クムランに籠ったとされる（サドカイ派はその時点で消滅していたとする説もある）。

これを当てはめると、以下のようなになる。

ゼーレは至高神であり、ネルフはその代行者だ。神の代行者という意味で、神殿祭司のサドカイ派を彷彿とさせるが、サドカイ派は捧げものには興味がない。死海文書がゼーレのシナリオであることを考えても、ゲンドウたちはエッセネ派ではないか。ヴィーレはユダヤ教ファリサイ派だろう。バビロン捕囚のあと、ファリサイ派はイスラエルに戻らなかった。ネルフに戻らず、ゲンドウとたもとを分かったヴィーレと重なる。

これも断定には至っていないが、エッセネ派はイエス・キリストや洗礼者ヨハネと関係が深いとされる。そしてエッセネ派は、クムランで律法と瞑想と沐浴の日々を送った。何のためかと言えば、神との合一のためだ。この点でエッセネ派は、神を直接体感しようと試みる神秘主義的な側面を持っている。またクムランで生活するにあたり、エッセネ派の人々は神との間に新しい契約を結んだとされる。

ソフィア（＝マリ）がゼーレ、つまりグノーシス主義で言う至高神からつかわされているのか、あるいはユダヤ思想で言う神のエージェントなのか、現時点では明らかでない。二号機を初見で操れるのも、ユーロネルフ所属のマリなら不思議はないかもしれない。しかしアスカのためにつくられた二号機を操縦するのは、通常想定される任務とは言い難い。マリはどこかで必要な情報を得ていたことになる。前項との関連で言えば、十四年経っているにもかかわらず、外見がほとんど変化していない。マリも選ばれた存在なのだ。

九号機を足止めした際、マリは「アダムの器」と言っていた。これはグノーシスで言う「アダマス」だと思われる。最初の間人アダムのことだが、流出説をとる西方グノーシス主義セツ派の思想では、高みへと上げられた人間を意味する。また、天界に暮らす

アダムとイブを指すともいわれる。いずれにせよ新しい「完全な」人類を想起させる言葉だ。足止めするのは、完全な人類の誕生を阻むためではないか。シンジが死んで復活しなければ、人類の救済は成らない。

死と復活は、正統キリスト教の中心的教義だ。その正統キリスト教成立に大きな役割を果たしたパウロは、もともとファリサイ派の人間で、イエス・キリストとその弟子たちを迫害する側だった。イエスの奇跡を目の当たりにしてファリサイ派を離れ、イエスを信じるようになった。

パウロは各地の信徒へあてた手紙で、イエスの死と復活により人類の救済が成ったと説く。ユダヤ教がキリスト教となったのは、パウロの功績と言っていい。異邦人たちの使徒、とユダヤ教徒から疎まれてもしたが、今日世界にキリスト教が広まっているのは、パウロのおかげなのだ。パウロに代表される正統キリスト教では、人類の救済はイエス・キリストの死と復活によって成就する。

この点でマリは、パウロである可能性も排除できない。今はヴィーレと行動をともにしているが、もしマリがパウロなら、いずれ別れることになるだろう。パウロはファリサイ派を離れ、イエスの教えを広めるため尽力した人物だ。マリも、物語が進むにつれシンジの重要性を認め始めたように思われる。だが、シンジをキリスト（救世主）として祀りあげることにはまだ疑問を感じているかもしれない。

Qで発した「ネルフのワンコくん」という呼びかけには、皮肉が込められているようだった。エヴァンゲリオンに乗りつづけたら、シンジは間違いなく死ぬだろう。それでいいのか、と問いかけているようでもある。マリとシンジの関係には、今後変化が生じるのかもしれない。

## 綾波レイと綾波ユイ

テレビ版では碇ユイだったシンジの母が、新劇場版で「綾波ユイ」となっていた。綾波レイと同じである。

かねてより、綾波レイはマグダラのマリアだと思ってきた。マグダラのマリアはイエスと行動をともにした女性の一人であり、グノーシス主義では重要な人物とされている。

「トマスによる福音書」では、シモン・ペテロ（シモン・ペトロとも表記）がマグダラのマリアをおとしめる発言をした際、イエスがたしなめ、マリアは救われるという趣旨の発言をする。また「フィリポの福音書」には、イエスが弟子たちの中でマグダラのマリアをもっとも愛したとする記述がある。「マリアの福音書」でも、イエスの死を悲しむ男の



弟子たちを励まし、救い主イエスの言葉を広く伝えるべきだと説く様子が描かれる。その意味でマグダラのマリアは、理想の模範的な弟子である。「救い主の対話」「ピスティス・ソフィア」などの文献でも、マグダラのマリアは救済の本質と意味を明確に理解しており、霊的な指導者にふさわしい資質があるとされる。

正典の新約聖書ではどうかと言うと、マグダラのマリアはイエスが葬られたのちその場所を見に行くが、遺骸はなく、途方に暮れ嘆いていると、イエスが語りかける。そこで語られたことを、マリアは弟子たちに伝える（ヨハネによる福音書 20.1-18 の要旨）。ヨハネ福音書はグノーシス的色合いが濃いとされるが、最古のマルコ福音書でも、またマルコ福音書とQ資料により編纂されたマタイ福音書でも、まずイエスはマグダラのマリアに姿を現し、そのあと弟子たちの前に現れる。正統キリスト教においても、マグダラのマリアがある程度の重要性を持っていたことがうかがえる。

綾波レイと碓シンジも、マグダラのマリアとイエスがそうであったように、物語を通して深いきずなで結ばれてゆく。Qにおいては、絆が断ち切られたかに見える。綾波レイの姿でシンジの前に現れたのは、彼が救おうとしたレイではなかった。「綾波型」とアスカは言っていたが、「綾波レイ（仮）」としておこう。

つづいて、綾波ユイを見てみよう。ユイはシンジの母だ。シンジがイエス・キリストなら、ユイは聖母マリアとなる。カトリック教会では、イエスの母マリアは無原罪のマリアと呼ばれる。無原罪とは原罪がないことを意味する。原罪は、エデンの園でアダムとイブがおかした罪により、人間が負うさだめとなったものだ。東方正教会では逆に、イエスを身ごもり産んだことで、マリアの原罪はなくなったと考える。そうでなければ、原罪を負う身で神を信じてきた人々とのあいだに断絶が生まれ、イエス・キリストと旧約聖書の断絶にもつながるからだ。ユイは果たしてどちらなのか。

私見だが、シンジを身ごもり産んだことで、ユイは人間を超越したものになったのではないだろうか。だから初号機に融合することができた。後の項でも述べるように、初号機はアダムからつくられている。人間を超越した存在になることで、アダムとの融合ができた。いやそれ以前に、ユイが身ごもったのはアダムの子ではないだろうか。聖母マリアは夫ヨセフによってではなく、霊によってイエスを身ごもった。ユイが聖母マリアであるなら、シンジはゲンドウの子ではない。おそらくアダムの子だ。

グノーシス主義では、イエスは至高神から遣わされる。至高神は男性性と女性性の両方をあわせもつ両性具有である。ユイの母は、至高神の女性性を示す存在なのだ。であれば、ユイとゼーレは一体ということになる。そしてユイと同じ名字を持つ綾波レイは、やはりマグダラのマリアである。綾波レイ（仮）もシンジを助け、シンジに従う。綾波レイ（仮）も、マグダラのマリアなのだ。

先へ進む前に、次の項で全体について考えてみたい。テレビ版「新世紀エヴァンゲリオン」から始まったこの物語が何を伝えようとしているのか、少しでもヒントが得られればと願ってのことである。

## 黙示文学としてのエヴァンゲリオン新劇場版

物語はゼーレのシナリオ、死海文書によって進んでいる。新劇場版：破では死海文書の外典が登場し、さらなる広がりを見せた。しかし破とQのあいだには断絶がある。十四年間の空白がそれだ。Qではいつのまにか十四年経ち、そのあいだにミサトはゲンドウとたもとを分かった。シンジは大罪人のように扱われ、困惑する。カヲルは何かを知っているが、すべてを告げることはない。最後にアスカとレイ（のように見える人物）、そしてシンジの三人は、ミサトたちのもとへと向かう。何が待ち受けているか、彼ら自身にも分からない。それでも三人は、未来を信じて歩きつづける。

ここで言う未来とは、「救済」だろう。救済とは何か、というのが大きなテーマのひとつだ。ゼーレのシナリオにも救済は用意されている。その代行者がネルフだ。ゼーレが直接手を下すのではなく、啓示を与え、一部の人間に任せるという点で、神と預言者の関係とも言える。だが預言者は王に仕えるのに対し、ゲンドウは自らが執行者となる。前項で、ゲンドウたちはエッセネ派だと述べた。神、つまりゼーレとの間に契約を結び、啓示を受けて事にあたる。契約を結んだのはミサトの父だ。契約を引き継いだゲンドウもミサトの父も、幻視する者だといえる。幻視とは、神あるいは天界を直接見たり、体感したりすることだ。エッセネ派が目指した神との合一も同じだろう。

幻視により啓示を受けることを中心にすえたのが、ユダヤのカバラ思想である。その秘儀は師から弟子へ直接伝えられ、長いあいだ門外不出であったが、中世になると広く一般に伝えられるようになる。中世ヨーロッパにおいて、メシア（救世主）待望論が高まったことと無関係ではないだろう。終末のときは近い、もうすぐ救世主がやってくる。そう考えた人々が、死後の魂の行方を知りたいと願っても不思議ではない。人々の要望にこたえる形で、カバラは一般に広まったのではないだろうか。

グノーシス主義では、至高神からの使いによって自らの神性を知り（グノーシスを得て）、その知識こそが救済であるとする。神性を知ることすなわち、啓示を受けるということだ。「ユダの福音書」でイエス・キリストは啓示者であり、ユダはイエスから啓示を受けた。預言をする人間に限られているのと同様、啓示を受けられるのは限られた人間だけだ。全員が神性を持つわけではない、としているのはそのためだろう。

限られた人間のためのもの、という意味で、黙示文学を除外することはできない。黙示文学とは、後期ユダヤ教や初期キリスト教において発達した形式で、象徴的（特徴的）言語で神の啓示を述べる。内容は世の終わり、救済についてである。新約聖書のヨハネ黙示録や、1947年に発見された死海文書のひとつ、エノク書もこの中に含まれる（エノク書にはエノクが見た夢や、天界で天使から受けた啓示が描かれている。おもに死後の魂に関するものだ）。また、1945年にナイル川流域のナグ・ハマディで発見された写本群、

「ナグ・ハマディ文書」にも、黙示文学の断片が存在する。それがヘルメス文書であり、ヘルメス・トリスメギストス（三倍偉大なヘルメス）から匿名の弟子へ、世の終わりについて神の啓示が与えられる。

カバラ、グノーシス主義、ヘルメス文書。それぞれ、数が重要な意味を持つ。エヴァンゲリヨンの物語も同様だ。新劇場版：Qでは八・九・十三号機が、破では Mark06 が登場した。またパイロットも、ファースト、セカンド、サードという序数詞で表わされる。それらの数字が何を意味するのか、明らかにされていない。黙示文学で扱われる終末と救済は特徴的な言語で語られ、誰でも理解できるようにはなっていない。エヴァンゲリヨンの物語は、黙示文学なのだ。テレビ版は当時の社会情勢を反映してか厭世観が強く、救済という希望はわずかに見出されるのみだが、新劇場版では希望が前面に押し出されている。希望はある、だからあきらめないで、一步ふみだして。そう言っているように感じる。

You are (not) alone. You can (not) advance. You can (not) redo. 新劇場版：序、破、Q のサブタイトルだ。いずれも not が挟まれているが、カッコに入れられ、あからさまな否定とはなっていない。それでも受け取る側は、つい not を入れて読んでしまうだろう。You are not alone. You cannot advance. You cannot redo. しかし、not を入れるべきなのは、最初の You are (not) alone. のみだ。きみは一人じゃない。それが主たるメッセージであるからだ。

同様に、破とQのサブタイトルも、You can advance. You can redo. と読むことができる。いずれも言外に、if you want/wish（きみが望むなら）と続くことをにおわせる。つまり、きみが望むなら、きみは前進できるし、やり直すことができる。そう言っているのだ。

それなら、はっきりそう言ってくればいいのに、と思うかもしれない。しかし、このようにある種「もって回った」言い方をすることこそが、エヴァンゲリヨンの物語が黙示文学であることの、何よりの証左ではないだろうか。黙示文学は象徴的な言語で、限られた人に分かるように伝えられる。上述のヘルメス文書にも、分かる人に分かるように書きなさい、という趣旨の指示がある。誰にでも分かるように書いてはいけないのだ。世の終わりの魂の救済は、誰でも知ることができるものではない。だからこそ、エヴァンゲリヨンの物語はゼーレとゲンドウによって紡がれ、それを見る人々の視点から語られる。伝えたいのは、救済という名の希望だ。

冷戦が崩壊し、「9.11」を経て、世界には超大国が存在しなくなった。そんなとき「3.11」が起きた。非常に多くの人々にとり、災害は物語ではなくなった。たとえば今の日本で、『日本沈没』を映画やドラマにすることは、ほぼ不可能だろう。なぜなら多くの人にとって、『日本沈没』は物語ではないからだ。「3.11」以前は、いつかこういうことが起こるかもしれない、そう考えることはできた。だからドラマにも映画にもなった。だが今は、画面を直視できない人のほうが多いだろう。リアリティを追求すればするほど、現実の災害が想起され、癒えない傷を再認識してしまう。

新劇場版：Qと破のあいだに断絶があるのも、おそらくそれが理由だろう。癒えない傷をえぐることなく、現実をただなぞるだけにならないため、思いきった転換が必要だったのではないか。その意味で、Qの試みは成功したと言える。そして、「巨神兵東京に現わ

る」がQと同時上映になったのも、同じ理由からではないだろうか。日常と非日常のあいだに断絶はない。ふとしたきっかけで日常はひっくり返り、価値の転換が起こる。そのことに多くの人が気づいたからこそ、希望が必要なのだ。

次の項からは、ゼーレのシナリオとされる死海文書と、死海文書の外典、さらには数について、考えてみたい。まずはQに登場した八号機、九号機、十三号機の、八・九・十三。続いてファースト、セカンド、サード（チルドレン）に象徴される一・二・三、そしてカヲルの六（Mark06）について考えてみようと思う。

## 死海文書と外典（1） 八、九、十三について

テレビ版から新劇場版までを通じて、ゼーレのシナリオは死海文書によっている。そして新劇場版：破では、六号機以降の建造が死海文書の外典によるとされた。

Qで登場した八号機、九号機のことを考えてみよう。まず問題となるのが、死海文書の外典である。ゲンドウの言葉を、どの程度厳密にとらえるべきだろう。開示されていない、という部分を厳密に解釈（＝破の公開時まだ知られていなかった、と）するべきだろうか。あるいは、Qで八号機、九号機、そして十三号機が登場していたことを主眼に据えるべきだろうか。このどちらをとるかと言えば、おそらく後者の立場をとるべきだろう。

六号機以降、番号の欠けている七、十、十一、十二号機も建造されたのかもしれない。しかし現存しているのは八、九、十三である。十三号機はカヲルとシンジが乗るダブルエントリー機であり、十三の持つ意味については、カヲルとシンジの項で述べたとおりだ。八と九を最重要と考えた場合、ヘルメス文書、とくに「第八のものと第九のものに関する講話」が思い浮かぶ。

ヘルメス文書とは、ヘルメス・トリスメギストス（三倍偉大なヘルメス）という名の師が匿名の弟子に語る形式をとっているもので、内容は神からの啓示である。その中の「第八のものと第九のものに関する講話」「感謝の祈り完璧な教え」が1945年、ナイル川流域のナグ・ハマディという町の近くで発見された。同時期に発見されたものは、その地名から「ナグ・ハマディ文書」と呼ばれる。『ナグ・ハマディ文書チャコス文書グノーシスの変容』ではナグ・ハマディ文書を類型化し、神話論的グノーシスから、哲学的・神秘主義的グノーシスへの変容について語っている。上述の二つもおさめられ、いずれも神秘主義的グノーシスに分類される。

神秘主義というのは、神を（幻視により）直接体感しようとするものだ。大貫隆によれば、神話論的グノーシスでは、世界の成り立ちなど神話の内容に注意を奪われ、救済の

鍵である、自身の神性の認識にはなかなか到達しない。哲学的・神秘主義的グノーシスはこれを補うものであり、とくに神秘主義は直接体感しようとするため、「主人公の魂の上昇が描かれる。それは彼の『認識』の高まりとともに、彼の存在そのものが変容していくプロセスでもある」（『グノーシスの神話』311 ページ）。ここに書かれていることは、シンジたちパイロットがエヴァンゲリオンと一体化するプロセスにも思える。

八と九にどのような意味があるのか、宇宙の構造から考えてみよう。

『グノーシスと古代宇宙論』では、ギリシャ起源の、同心球の形状をした宇宙構造図をとりあげている。これは伝統的な宇宙論で、「七つの遊星天」と「第八の恒星天」の上に神（叡知界）が存在する（6 ページ）。ここで言う神は創造神である。グノーシスではこの宇宙論を否定したのだが、構造そのものを否定したわけではない。グノーシスオフィス派の人々は、七つの星の上にパラダイス（楽園）が存在すると考えた（同 29 ページ）。楽園とはアダムとイブが追放されたエデンの園であり、愚かな創造神がつくったものだ。そのさらに上に、至高神は存在するのだ。

「マリアの福音書」には、死後の魂が対峙する怒りの七つの権力について語られている。それらを論破し、いと高きところへと魂は昇る。カバラ思想の聖典『光輝の書（ゾハル）』にも、死後の魂が地上から天へ昇り、エデンの園へ達するという記述がある。それは下位のエデンの園であり、最終到達点ではない。「さらに上昇を許された（靈魂は）王の栄光を見守りながら、天なる歓喜の場をたのしむ。そこは天国と呼ばれる」（箱崎総一『カバラユダヤ神秘思想の系譜』267 ページ）。

カバラ思想でも、魂は上昇する過程で審問を受けるが、グノーシスとは異なり、論破すべきものではない。この宇宙観の違いが、グノーシスと非グノーシスを大きく分かつものであるが、神秘主義という枠組みにおいては、カバラもグノーシスも、それからヘルメス文書の断片も、同列に語る事が可能だ。

カバラでは律法の研究や瞑想などによって幻視を試みる。その方法等については、口述により師から弟子へ直接伝えられていく。「第八のものと第九のものに関する講話」も同様に、直接啓示される形をとっている。第八のものを知ること、初めて第九のものについて啓示を受けるとし、地上から魂が昇っていく過程で第八のものを知り、それによって第九のもの、つまり至高神のもとへ到達するのだ。

新劇場版：Qでマリが八号機に乗り、綾波レイ（仮）が九号機に乗っていたのは、偶然とは思えない。八号機は八番目のパラダイス（楽園）を象徴するのだ。新しい「完全な」人間になるためアダムの器が必要であり、その認識に到達するためには、八号機が欠かせないのだ。救済への鍵は、八号機と九号機が握っているのかもしれない。

このように、八と九がナグ・ハマディ文書に由来するとすれば、六号機以降建造のよりどころとなる外典は、ナグ・ハマディ文書をさすのだろう。であるなら、外典に対する正典は、やはり死海文書なのだ。

字義どおりに解釈すれば、死海文書は 1947 年にクムラン洞窟で発見された写本群を指す。そこには旧約聖書の正典、外典、偽典が含まれていた。この区別はキリスト教によるもので、写本が書かれた当時、ユダヤ教の正典とされた文書も多かったという。エノク書もここに含まれる。

ほかには「ユダヤ共同体憲章」「戦いの巻物」などがある。「ユダヤ共同体憲章」では、律

法の重要性、共同体の規則、罰則などのほか、終末のときには光の子と闇の子による戦いが行なわれるとされている。「戦いの巻物」によれば、その戦いは35年のあいだ続き、光の子側と闇の子側それぞれが三回勝ったり負けたりを繰り返したあと、「最終戦は神の介入によって二人のメシアに導かれた光の子たちの大勝利に終わり、闇の子たちは永遠の地獄へと落ちることになる」(ベン・ソロモン『死海文書の封印を解く』84ページ)。

「戦いの巻物」には武器の使用法や戦闘隊形、指揮の執り方、物見櫓の使用法など、きわめて実践的な内容が含まれており、戦闘マニュアルとも考えられている。エヴァンゲリヲンの物語に当てはめれば、おそらくネルフの指揮系統などは、これに基づいているのだろう。となれば、やはりゼーレのシナリオは死海文書であり、光の子と闇の子の戦いも、確実に起こることなのだ。二人のメシアに導かれた光の子たち、という記述に注目したい。十三号機がダブルエントリーシステムを採用したのは、二人のメシア、つまりカヲルとシンジがパイロットとして乗るためだったのではないか。

『エヴァンゲリヲン新劇場版：破 2.22』で、真のエヴァンゲリオンとリリスの復活が成れば契約は終了する、とゼーレは言っていた。リリスはアダムの最初の妻であり、アダムのもとを去ったあと、悪魔とのあいだに子ども(リリン)を生んだとされる。旧約聖書にそのような記述はなく、この伝承は中世以降生まれたようだ。リリスが子どもをもうけたのは、サマエルだと思われる。サマエルはユダヤ伝承で死の天使であり、サタンと同一視されることもある。

Qでゼーレとの契約が終了したのであれば、それはつまり、真のエヴァンゲリオンが登場し、リリスも復活したということだ。二人のメシアがカヲルとシンジであるとするなら、真のエヴァンゲリオンとは十三号機を指すのかもしれない。だがカヲルはメシアの座を追われ、裏切り者の汚名を着せられた。しかしゼーレはそのことを問題視しているようには思われない。またリリスの復活とは何を意味するのだろうか。あとの項でももう少し詳細に考えてみたいと思う。

十三号機について、ネブカドネザルとの関連に触れておきたい。『エヴァンゲリヲン新劇場版：破 2.22』では、北極のベタニアベースで「マルドゥク計画」が進行しており、「ネブカドネザルの鍵」が重要だとされた。これはバビロン捕囚を行なったネブカドネザル二世を指すと述べたが、実はもうひとつ意味がある。

ネブカドネザル一世の時代に、メソポタミアでマルドゥクという神が崇拜されていた。マルドゥク神は四つの目と四つの耳を持つとされる。十三号機にも目が四つあり、顔の横には耳のようなものが片側二つずつ、計四つある。ベタニアというのは新約聖書によれば、イエスが過越の祭りでエルサレムに入る前、立ち寄った場所だ。ここでイエスは香油を塗られている。これは埋葬の準備であった。過越の祭りのエルサレムでイエスは逮捕・尋問され、その結果十字架につけられた。

ユーロネルフはネブカドネザルの鍵で十三号機を作り、シンジの死と復活を演出しようとした。それをゲンドウが阻み、代わりに十三号機をつくった。あるいは、ゲンドウ自身がマルドゥク神になろうとしているのか。Qでゲンドウはバイザーを着用していた。そのため、十四年の歳月が顔に刻まれているかどうか、定かではない。しかし顔を隠すのには理由があるはずだ。マルドゥク神は四つの眼と四つの耳を持っている。もしバイザーの下に、四つの眼があるとしたら……？

イエスは伝道生活に入る前、時は満ちた、と発言した。カヲルは破からQにかけ、数回「時が来た」と言っている。だが「満ちて」はいない。救世主の到来は約束されているが、まだ現れていない（あるいは自覚を持っていない）ということではないか。次は四人のパイロットについて、考えてみたい。

## 死海文書と外典（2） 一、二、三、六について

西方グノーシス主義のヴァレンティノス派やセツ派では、ソフィアの企てにより創造神が生まれ、その神がつくった世界に人間はとらわれていると考えた。前項で宇宙論について触れたオフィス派は、セツ派と同一視する見方もあり、また一般にグノーシス主義という、セツ派と関係のある人々を指すことが多いとされる。

カヲルとシンジの項で触れた「ユダの福音書」は、セツ派の人々にとって重要なものだ。ナグ・ハマディ文書より30年ほどのちに、エジプトで発見された写本群に含まれる。これらの文書は、手にした古美術商のフリーダ・ヌスバーガー＝チャコスという人物の名前から、「チャコス文書」と呼ばれる。ナグ・ハマディ文書と同様、チャコス文書も、死海文書の「外典」と言えるだろう。

さてセツというのは、アダムの三番目の息子、セトである。セトをキリスト、つまり救世主と同一視する人々がセツ派なのだ。旧約聖書において、アダムの最初の子はカインであり、二番目はアベルだった。そのアベルをカインは殺して埋めてしまう。アベルの居場所を神に問われたカインは、自分は弟の番人ではないと答え、神の怒りを買う。殺人をおかしたのみならず、神に嘘をついたとして追放されるが、殺されることはなかった。神がカインにしるしをつけたからである。カインを殺す者は七倍の報復を受けるというそのしるしにより、カインは生きながらえた。そして三番目に生まれたのがセトである。カインもアベルもいなくなったが、イエス・キリストへと連なる系譜は、セトに受け継がれたのだ。

セツ派の文書には、カインとアベルの名前がある。ナグ・ハマディ文書のひとつ、「エジプト人の福音書」だ。世界を統治する十二人の天使のうち、六人目がカイン、七人目がアベルとされている。「ユダの福音書」では、混沌の世界を支配する五人として、キリスト（「〔セ〕ツ、キリストと呼ばれるもの」『原典ユダの福音書』176ページ）のほか、「エジプト人の福音書」で挙げられた、二人目から五人目までの天使の名前が出されている。「エジプト人の福音書」で名前を挙げられるとき、カインは太陽になぞらえられる。セツ派の人々にとって、カインが重要な存在であったことがうかがえる。

セトは三番目であり、救世主とされていた。カインは六番目である。サード（チルドレ

ン)のシンジはセトであり、カヲルと Mark06 はカイン、と考えることはできないだろうか。

洗礼者ヨハネ、キリスト、ユダ、カイン。カヲルが持つと思われる役割である。ゼーレから送り込まれたカヲルが帯びていたのは、洗礼者ヨハネとキリストの役割であった。実はそのとき、カインの役割も持っていたのではないだろうか。「フィリポの福音書」では、カインは蛇の子とされている。蛇はアダムとイブに、彼らが本来何者であるかを知らせに来た使者だ。カヲルはシンジに対し、彼が本来何者であるかを知らせに来た。本来キリストとしてであったはずだが、ユダに仕立て上げられたことにより、カインとして知らせる役割を、今後帯びるのではないだろうか。

セツ派の人々にとってカインが重要な存在であった、と上に書いた。カインは太陽になぞらえられる。カヲルの Mark06 は、月でつくられていた。太陽と月を崇拝するのがマニ教だ。マニ教は東方グノーシス主義で、善悪二元論を採用している。この善悪二元論も、物語の重要な要素であることを記しておきたい。

つづいて一と二について考えてみよう。

『トマスによる福音書』では、最初の間人アダムは両性具有であり完全な存在であったが、イブがアダムからとられ男と女になったことで死が生まれた、とされる。一は完全であり、二は死を意味するということだ。死後の魂は完全な存在になるために、至高神のもとへ還るのだ。

三のときと同様に考えてみよう。アダムの三番目の息子セトが、サード(チルドレン)のシンジであった。三がシンジを表すなら、一はファースト(チルドレン)、二はセカンド(チルドレン)であるはずだ。一は完全であり、二は死を意味する。その理屈でいけば、綾波レイは完全な存在で、式波・アスカ・ラングレーは死を意味することになる。より厳密には、死すべき存在としての人間を象徴する。

死が生まれたのは、アダムからイブが分離したためである。一と二のたとえが正しければ、アスカはレイから分離されたのではないか。レイは感情を持たず、反対にアスカは、驚くほど多様な感情を見せてくれる。ミサトの作戦指示に対しても、レイは冷静に根拠を尋ねるがアスカは反発し、自分だけでやりたいと言う。自分が一番でない知ってしまったが、これからも一人で生きて行かなければいけないから。一理はある。だがお話であるとはいえ、アスカの感情の爆発は際立っている。彼女たちはもともと一人であったものが二人になり、シンジを支え、成長を促す存在なのではないか。

では、もともとの一人とはいったい誰なのか。

完全を表すとされる一は、カバラ思想でも重要な意味を持つ。一は基本数であり、二から十までの数は一から生み出されている。「一という数値は、神霊と完全に同一視されている」(箱崎総一『カバラユダヤ神秘思想の系譜』105 ページ)。

ゼーレは至高神であり、シンジの母ユイはその女性性をあらわすのではないかと前項で述べた。ゼーレとユイは一体であり、ユイを模してレイがつくられ、そこからアスカが分離されたのではないだろうか。イブが分離される前のアダムが完全な存在であったように、異なる二つが統合されることで完全な存在となる。アスカが感情を表すなら、レイは理性だろうか。感情と理性は、女と男の特徴でもある。

ユダヤ人哲学者、アレクサンドリアのフィロンは、男女の統合を説いた。その著書『創世



記注釈』の中で、「知恵や分別、正義、勇気、ひとことで言うなら美德によって（事物を受けとめる）」ことが望ましいとしている（『イエスが愛した聖女マグダラのマリア』161ページ）。男と女とは、理性と感情のことであり、精神と肉体のこともある。ユング心理学にも、アニマとアニムスという、内的人格を表す語が存在する。生物学的な性とは異なる内的人格があり、外的人格、意識との調和的な統合を実現する。レイとアスカは、二人で一人。二人いることで調和的な統合が実現され、完全な存在となるのだ。

旧劇場版ではシンジとアスカの二人が、荒廃した世界に残される。新劇場版でも同じ流れだろうか。Qではマリが、アスカのことを「お姫様」と言っていた。やはりアスカはシンジの伴侶なのだ。Qの最後で、シンジと眼帯をしたアスカ、それから綾波レイ（仮）が三人でミサトたちのもとへ旅立った。これには、重要な意味があると思われる。

カバラの『光輝の書（ゾハル）』には、エデンの園の番人の言葉として、次のようなものがある。「彼らは二つであり、一つが結びついて三になる。彼らが三になったとき、彼らは一である」（箱崎総一『カバラユダヤ神秘思想の系譜』296ページ）。アスカたち三人に当てはめた場合、アスカとレイに、シンジが結びつくということだろう。三になり、なおかつ一であるということは、三人は統合されて一つになるのだ。マリが言っていた「アダムの器」とは、これを意味するのだろうか。たしかに、そのように思われる。マリが綾波レイ（仮）を足止めしたのは、シンジとの接触を防ぎたかったからではないか。そこにはアスカが介在しなければならなかった。綾波レイ（仮）とシンジが直接結びついてはいけなかったのだ。

一方ゲンドウは、綾波レイ（仮）あるいは初号機の中にいる綾波レイと、シンジをひとつにしたいのではないか。エデンの園の番人が言った言葉を考慮に入れるなら、その際、シンジの母ユイも重要な役割を果たす。Qにおいてゲンドウは、巨大なユイと対峙していた。そのユイと綾波レイ（仮）が結びつき、そこへシンジが結びつくのかもしれない。あるいはアダムの器である九号機が使われるのか。初号機が使えるなら、初号機とシンジが融合するだろう。初号機を使わない場合、巨大なユイと、綾波レイ（仮）および九号機が重要な役割を果たすのではないだろうか。

レイがユイを模した存在であるなら、至高神のもとへ還るには、レイとひとつになるのが最もふさわしい。その意味でも、綾波レイ（仮）はアダムの器である。しかしマリの所属する組織は、アスカとシンジをひとつにしたいのではないか。その組織とは、ユーロネルフではないだろうか。しかしユーロネルフは存在しているのだろうか？ もちろん別の組織になっていることも考えられる。マリがヴィーレと行動をとることは、ヴィーレがユーロネルフだからではないか？ これについてはまた別の項で、もう少し詳しく考えてみたい。

ここまで、死海文書と外典について、それから数について考えてきた。その結果、シンジとレイの特異性が明らかとなった。「やはりあの二人で初号機の覚醒はなった」、と冬月が言ったとおりだ。次の項ではエヴァンゲリオンとは何なのか、使徒とは何なのかを、考えてみたいと思う。

## 使徒とエヴァンゲリオン

死海文書はゼーレのシナリオである。外典であるナグ・ハマディ文書やチャコス文書が加わり、エヴァンゲリオンの建造が進んだ。死海文書にはエノク書も含まれ、終末が描かれる。それは天使あるいは神からの、エノクへの啓示であり、エノクは神にとられたあと、イスラエルと人々の行ないをずっと見ていた。ノアの大洪水も、イスラエルの分裂と滅亡も、そして最後の審判の日に何が起こるのかも書かれている。

エノク書はゼーレのシナリオのひとつであると同時に、神からの啓示をしるした黙示文学でもある。東方グノーシス主義のマニ教が正典として採用し、正統キリスト教の正典から除外された。

エノク書には、墮天使が人間の娘とまじわり、巨人が生まれたとする記述がある。巨人は地上で災いを起こすだけでなく、「抑圧と破壊と攻撃と戦いによって地上をうちこわし、さわがす」（関根正雄編『旧約聖書外典』下 217 ページ）。この災いを起こす巨人こそが、使徒ではないだろうか。テレビ版新世紀エヴァンゲリオンでは、使徒の塩基配列は限りなく人間に近かった。しかし、人間と使徒を隔てているものがある。それが墮天使の血、「パターン青」ではないだろうか。

グノーシス主義には、アイオンとアルコーンという二つの用語がある。どちらもギリシャ語だ。

アイオンは高次の霊、あるいは神的存在である。至高神の下にあり、至高神に由来する神的存在のことだ。救済について知らせるため、至高神のもとからやってくる使いと考えられる。「ユダの福音書」で描かれたイエス・キリストもアイオンであり、ヴァレンティノス派やセツ派で重要な役割を持つソフィアもアイオンだ。カラルとマリも「アイオン」なのだ。

アルコーンは古代ギリシャでは最高執政官の称号であり、世俗的な支配者の意を持つ。東方グノーシス主義では暗闇の王国にいる下級の霊的存在を指す。アルコーンは、アイオンよりも下位にある。このアルコーンと人間のあいだに生まれたのが使徒。そう考えることはできないだろうか。

巨人たちは「この世の総決算が行なわれる大いなる審判の日まで破壊を行なう」（同書、同ページ）とある。巨人が使徒であるなら、使徒との戦いは審判の日まで続く。エヴァンゲリオンは、使徒と戦うためにつくられた。使徒が現れ、エヴァンゲリオンによって使徒をせん滅する。それが審判の日まで続くのだ。

新劇場版でゼーレは人間の姿をとらず、モノリスの形で登場しているが、シンボルマークの七つの目は変わっていない。そこに蛇と林檎が加わった。林檎は言うまでもなく、エデンの園でアダムとイブが食べた善悪の木の実であり、蛇はイブをそそのかし、林檎を

食べさせた張本人だ。「フィリポの福音書」では、アダムとイブに彼らの神性を知らせる存在であり、福音をもたらす使者である。

福音の語源は、ギリシャ語の euaggélion であり、「よい知らせ」という意味を持つ。グノーシス主義では知ることが福音であり、愚かな創造神による悪しき世界を抜け出す手段は、知ることをおいてほかはない。知ことは救済であり、パイロットがエヴァンゲリオンと一体になることでもたらされる。救済の手段がエヴァンゲリオンなのだ。では、エヴァンゲリオンとは何なのか。

ミサトはしばしば、「エヴァって何なの？」と疑問を発した。リツコは人のつくりしものと言った。使徒が墮天使と人間のあいだに生まれた巨人だとするなら、エヴァンゲリオンも何かしら人間でないものを取り入れ、しかも同等ではなく、まさっている必要がある。使徒がアルコーンなら、エヴァンゲリオンはアイオーン。神あるいは神的な存在でなくてはならない。

零号機、初号機、二号機について考えてみよう。

新劇場版：破で登場したとき、アスカは零号機をテストタイプ、初号機をプロトタイプ、二号機はプロダクトタイプだと言った。テストタイプは試験機、プロトタイプは試作型、プロダクトタイプは製品型、と仮に訳語を充てることにする。

試験とは、(動くかどうか) 試してみることであり、試作型は、製造現場において量産化を前提に、問題点を洗い出すためのものとされる。製品型は、製品として完成されたものだ。同時に量産可能であることをも意味する。

レイは神であり、シンジはセト(キリスト)、アスカは人間の象徴である、と前項で述べた。それを当てはめると、本当の意味で神的な存在であるのは零号機だ。前項で述べたように、一は完全な存在をあらわす。(本当の意味で完全になるためにはアスカと統合されなければならないが) ファーストの綾波レイは一であり、至高神の写しだ。零号機も至高神からつくられている。ではリツコの言う人のつくりしものとは、何を意味するのだろうか。

『グノーシスの変容』に収録されたヘルメス文書の断片「感謝の祈り完璧な教え」には、神々は頭部しかもたないとある。「神々の種族は純粋な素材(物質)から生じてきたのであり、彼らの身体は頭部だけ」(333 ページ)とされているからだ。人間は神に似せて像をつくり、その像は身体を持つ。つまりエヴァンゲリオン零号機には、頭しかなかった。人間が身体をつけ、神の像とし、拘束具をはめて使役の対象とした。テレビ版では、エヴァンゲリオンの製造現場におびただしい骨が残されていた。それも脊椎など大きな骨だ。これらはみな、零号機の身体をつくるために使われ、失敗に終わった(うまく適合しなかった)ものではないだろうか？

新劇場版：Qにおいて、ゼーレとの契約が終了したとき、モノリスには脳だけが映し出された。これも、神々は頭部しかもたないことを意味するのだろうか。ゼーレ(Seele)とはドイツ語で魂を意味し、ユング心理学でも使われる語だ。『ユング心理学辞典』には「ここ」とある。肉体に対する精神だ。肉体を持たないゼーレは、間違いなく神である。

ほかのエヴァンゲリオンはどうだろう。初号機の眼は二つだ。二つの眼は人間をあらわすとも思えるが、使徒と戦うことはできない。人間に似ているが、人間という不完全な存在ではなく、完全な存在。ユダヤ人哲学者、アレクサンドリアのフィロンが言う原始

の人、天の人間であるアダム・カドモンだ。第一のアダムとよばれ、救世主（メシア/キリスト）とされる。パウロの言う第二のアダムに相当する（これについて、箱崎総一は『カバラユダヤ神秘思想の系譜』の中で、パウロが思い違いをした可能性に触れている。つまり、アダム・カドモンは第二のアダムではなく第一のアダムであり、キリストであるということだ）。『トマスによる福音書』も、最初の人間アダムは完全な存在だった、としている。同じく二つの眼をもつ Mark06 も、この系統だ。おそらく第一の使徒アダムからつくられたのだろう。

初号機もやはり頭部だけだったのかもしれない。ユイが融合したことにより、全身が形づくられたとも考えられる。いずれにしろ、神に近い存在のシンジとカヲルには、ふさわしい機体ではないだろうか。

さて二号機だが、これは少々毛色が違う。なぜかといえば、ユーロネルフでつくられたからだ。

二号機の眼は四つだ。ビーストモードも零号機と初号機にはない。二号機にそれが存在することも、マリが発現させるまでリツコたちは知らなかった。ユーロネルフはシンジの死と復活を演出しようとしているのではないかと以前の項で述べた。そうであるなら、ユーロネルフは創造神の側にいる。創造神は旧約聖書の神、ヤハウェだ。その名はみだりに口にしてはならないとされ、「神聖四文字」と言われる。アルファベット YHWH がそれだ。二号機の四つの眼は、四つのアルファベットを表しているのではないかと。この四文字を使ってつくられるゴーレムが、二号機なのではないか。

ゴーレムはカバラの伝承にある、土からつくられる像をさす。口から前頭部に紙片を入れることで生命を得て、動きだすと考えられた。紙片には、神の名をかたどった文字の組み合わせが書かれている。それが「神聖四文字」だ。

新劇場版：Qでは二号機改が登場するが、四つの眼のうち、ひとつが義眼である。二号機改がゴーレムで、神の名をかたどった神聖四文字で動くとしたら、義眼は文字が変わったことを意味する。またアスカはエヴァの呪縛によって、肉体は十四歳のままである。

アスカがビーストモードを発現できるようになったのは、アスカ自身が変化したからではないか。エヴァの呪縛によって、その資格を得たということだ。レイから分離された人間であるアスカが、人間とは少し違うものになった。だからこそ、マリのようにビーストモードを操れるようになったのではないだろうか。

二号機改の義眼が文字あるいは綴りの変化を表すなら、ヤハウェではなくバルベローを表すのではないかと。バルベローとは、セツ派の文書では至高の国にいる神であり、ヤハウェと同じく神聖でみだりに口にしてはならないものだ。語源も、古代ヘブライ語の「神」と「四」を意味する言葉とされる。「四文字の神」ということだ。

ヤハウェからバルベローに変わるとすると、二号機改とアスカが救済にひと役買うのだろうか。Qにおける予告では、八十二と表現され、二号機改と八号機が統合されたようなエヴァンゲリオンが登場していた。八と二を足すと十だ。十は、カバラ思想では完全な数である。マリとアスカが完全な存在になるということだろうか。もしそうなら、救済につながる役割を果たすのかもしれない。

初号機について、もう少し補足しておこう。マニ教は善悪二元論だと上に書いた。またマニ教はアダムを特別視している。アダムは光の王によって創造され、光の王国の五つ

の要素を与えられたことになっている。ここで言うアダムは完全なアダム、つまりフィロンの言うアダム・カドモンである。

しかしマニ教のアダムは、闇の王国からその存在を与えられ、囚われの身である。闇の王国から脱出するため、みずから持つ光の要素を発揮しなくてはならない。闇の王国にいる下級の霊的存在がアルコーンだ。アダムはそのアルコーンから、逃れなければならない。初号機もマニ教のアダムと同様、闇と光、ふたつの要素を兼ね備え、光の要素を発揮するために、セト（キリスト）としてのシンジと、至高神の写しであるレイが必要なのではないか。初号機にはシンジの母、ユイが眠っている。破の最後で初号機が覚醒しかけたとき、初号機の隣に巨大な綾波レイが立っているように見えた。あれは、ユイだったのではないか。

巨大なユイは、Qでゲンドウと対峙していた。そのユイと、初号機の隣に立っていたユイは同じではないか。つまりユイは初号機から解放されるにいたった。レイとシンジが、初号機の中で一体となったためである。リリスの復活とは、ユイが解放されたことを指すのではないだろうか。

しかしリリスは、悪魔サマエルとのあいだに子を成した。ユイが至高神の女性性をあらわすのなら、リリスではあり得ないように思われる。

だがこれも、ユイが「完全」なるゆえではないだろうか。つまり善と悪が一体なのだ。アダムからつくられた初号機は善と悪を持ち、ユイも善と悪を持っている。アダムの子シンジも、やはり善と悪を持つ。そこへレイが加わった。レイには善しかない。不完全であるがゆえに、純粋な善性を持っている。だからこそ、囚われていたアダム（＝初号機）は、みずからの持つ光の要素を発揮することができた。これこそが初号機の覚醒であり、レイとシンジによって初めて可能になったのだ。

次からの三つの項では、今後の予想を含め、これまで触れられなかったことについて考えてみたい。

## 今後の展望など（1） ゲンドウとリリスを中心に

リリスはカバラだけではなく、正統キリスト教においても悪魔である。アダムのもとを去り、サマエルとの間にリリンを生んだ。カバラでは、サマエルは蛇だ。「彼はへびの姿で現れる。へびの理想的な形は悪魔」であり、「サマエルは知恵を通してこの世界に（死の）原因をもたらした」（箱崎総一『カバラユダヤ神秘思想の系譜』418 ページ）。グノーシス主義では福音をもたらすが、カバラでも正統キリスト教においても、蛇は悪しき存在である。

リリスの復活は、ユイが解放されたことを意味する、と前項で述べた。では、シンジが槍を抜いたリリスは何者なのか。また旧劇場版で、ゲンドウはリリスと一体になるために、綾波レイを使おうとしたが拒絶され、目論見は果たされなかった。新劇場版ではどうだろうか。

まずゲンドウとリリスのことを考えてみよう。リリスはサマエルの伴侶となった。旧劇場版で描かれたのは、このことではないか。ゲンドウはリリスと一体になり、リリスを誕生させようとしたが果たせなかった。サマエルとはゲンドウのことだ（この場合カヲルは間違いなくゲンドウの子である。カインは蛇、つまりサマエルの子であるからだ）。新劇場版でもゲンドウは、リリスと一体になろうとするのだろうか。そして新しい人類を生むのだろうか？ 最初の答えはイエス。二番目の答えはノーだ。

死海文書にある光の子と闇の子の戦いは、マニ教の二元論を思わせる。ゲンドウがリリスと一体になるのは、悪となるためだ。悪となり、シンジたちと戦って敗れるのが目的なのだ。シナリオを成就させるためでもあり、子に父を乗り越えさせるためでもある。光の子として、アダムは闇の子と戦い、勝利をおさめなければならない。ここでいうアダムは初号機である。

完全な人間アダムとユイの子であるシンジは、キリストなるセツとして、初号機と運命をともにするのかもしれない。そのときレイ、あるいはアスカが（もしくはユイ、あるいはマリが）、シンジを助けるのだろうか？ 現時点では予想できないが、彼女たちが何らかの役割を果たすのは間違いないだろう。

カヲルとシンジが十三号機でリリスのところへ赴いたとき、リリスは四つん這いになり、二本の槍が背中に刺さっていた。カヲルは当初、それをロンギヌスの槍とカシウスの槍と言っていたが、どちらもカシウスの槍だと気づいた。それをシンジが抜いたことでガフの扉が開きかけ、カヲルは自分が閉じると言って消える。結果として、フォースインパクトを防ぐことができた。ガフの扉は初号機が覚醒しかけたときも開いていたが、そのときはカヲルがカシウスの槍を初号機に刺し、サードインパクトは起こらなかった。

しかし Mark06 がセントラルドグマを下降し、リリスのもとへ行ったとき（『エヴァンゲリオン新劇場版：破 2.22』予告）、カヲルはカシウスの槍をリリスに刺したのだ。でなければ、ロンギヌスの槍とカシウスの槍が刺さっていることを、カヲルが知っているはずはない。二本目の槍を刺したとき、サードインパクトが起きたか、あるいは「起きたことになっている」のだ。そのとき、リリスが十字架から降りたのではないか。リリスの復活とは、このことをも意味するのかもしれない。巨大なユイと四つん這いのリリスは、どちらもリリスなのだ。

八、九、十三の項で、ゲンドウがマルドゥク神になろうとしているのではないかと述べた。リリスと同化するため、人間ではない（人外の）存在となる必要がある。ゲンドウがマルドゥク神なら、リリスに魂はないだろう。巨大なユイもおそらく抜け殻だ。ではユイの魂はどこなのか。それは、九号機の中だ。九号機の中にユイがいるからこそ、パイロットは綾波レイ（仮）でなくてはならない。魂があってはいけないのだ。九号機の眼が一つであることも、完全な存在からつくられたことを示唆する。零号機が完全なる至高神のコピーであったように、九号機には至高神の女性性をあらかずユイが融合しているのではないだろうか。

しかしゲンドウがマルドゥク神であるなら、十三号機はどうやってつくられたのか。推測だが、Mark06 と、登場していない七号機の合体ではないだろうか。七号機もおそらく、初号機と似た外形なのだろう。眼も二つであれば、四つの眼を持つ十三号機に当てはまる。そうだとすれば、初号機がプロトタイプであるのもうなずける。初号機は十三号機のために存在したのではないか。

もちろん、ネブカドネザルの鍵で十三号機を建造した可能性も残されている。本当はどちらであるのか、あるいはどちらでもないのか。いずれにしろ、次の作品を待たなければならぬのはたしかだ。

## 今後の展望など（２） マリふたたび&カヲルの「時」について

マリとは何者なのか。改めて考えてみたい。

すでにソフィアあるいはパウロの可能性を指摘したが、ソフィアはグノーシス主義セツ派、ヴァレンティノス派の重要人物であり、ユダヤ思想でも神のエージェントとされている。

Qでマリが乗っているのは、眼が八つの八号機だ。八、九、十三の項で述べたように、八は八番目のパラダイス（楽園＝エデンの園）を意味する。創世記に登場するエデンの園は、創造神を象徴している。（創造）神のエージェント、ソフィアであるなら、マリがカバラ思想の完全な数、十にかかわりを持つのも当然かもしれない。救済にかかわることで、みずからの過失で乱れた秩序を回復しようとしている可能性もある。つまり、やり方はカバラ思想のやり方だが、グノーシス主義のソフィアとして秩序の回復を狙っている、とも考えられるのだ。

エヴァンゲリオンを破壊するのは、ヴィーレにとっても、何らかの理由で不適切であるからだ。

ゴーレムの伝承を生んだカバラには、ゴーレムの破壊についての話がある。内容を要約すると、世界のすべてを破壊するおそれを抱かせるほどにゴーレムが強大な怪物となったので、前頭部に隠された紙片を抜き取られ、土くれに戻された、というものだ。

これを当てはめるなら、エヴァンゲリオンは強大な怪物になったから破壊された、ということになる。しかしそこまで強大だったとは思われない。壊されたのは、三、四、五号機と、二号機で、二号機はQで二号機改として登場した。アスカは使徒による汚染に巻き込まれたが、それはアスカが「お姫様」になるためだ。ではなぜ三、四、五号機は破壊されたのか。

三体はいずれも北米ネルフのもので、四号機は基地ごと謎の消滅を遂げた。ここに何らかの意図、あるいは作為を感じる。四号機はS 2機関を搭載していた。これが完成すれば使徒に匹敵する存在となるはずだった。つまり人工的に使徒をつくり出すのだ。越えてはならない一線を越えた、ということではないだろうか？ その意味で不適切であったと言える。

ヴィーレには、別の目的もある。以下で考えてみよう。

新劇場版：破で、使徒が戦闘機を撃墜したとき、十字架が浮かび上がった。二号機が使徒をせん滅した際も、十字架が撃墜のしるしとなった。エヴァンゲリヲンの物語では、使徒がせん滅される際、必ず十字架が表示される。十字架は勝利のしるしであり、力と支配の象徴である。

十字架の形は、すべての秩序をつかさどるロゴスとして重要な意味を持つ。柴田有によれば、ロゴスは「神の下位に立つ『力』」である。それは神の側から世界史、自然、人間に向かって働きかける、ある秩序の勢力である」（『グノーシスと古代宇宙論』219ページ）。天体の秩序立った運行もロゴスの作用であり、その秩序が地上に反映されるのも、すべてロゴスのおかげである。ローマにおいて死後のカエサルは、ロゴスとして星の神々の一人に列せられた。正統キリスト教は、救世主キリストも同じくロゴスであるとした。カエサルとキリストを同列に置くことで、どちらも支配者と位置づけたのだ。

ロゴスは船の帆や農耕に使う鋤、人間の体など、十字形に顕現する。ローマの軍旗と盾は、十字形を採用していた。正統キリスト教はそれをキリストの十字架とからめ、力と支配の象徴としたのだ。その後、正統キリスト教はローマで公認され（313年）、その後391年に国教となる。数百年のあいだ、何度も迫害されながら、ついに正統キリスト教は正統となった。

これがエヴァンゲリヲンの破壊とかかわるのは、偶像の破壊においてである。正統キリスト教はローマで公認されたのち、偶像を破壊しはじめた。自分たちの、ではない。キリスト教は偶像崇拝を禁じている。破壊したのは、異教の神殿や偶像だ。イスラエルはたびたび大国の支配下におかれ、そのつど人々は異教の神に捧げものを贈り、偶像を崇拝した。さんざん苦しめられてきた偶像を、キリスト教は破壊したのだ。Qでヴィーレがしているのも同じことだ。

ヴィーレはファリサイ派だとマリの項で述べたが、正統キリスト教の祖、パウロはファリサイ派であった。ヴィーレも「正統」になろうとしている。その過程で、エヴァンゲリヲンの破壊は避けて通れない。なぜならエヴァンゲリヲンは、異教の偶像であるからだ。

ファリサイ派は死と復活を信じる。シンジの死と復活を演出しようとするユーロネルフもファリサイ派だ。つまりヴィーレが、ユーロネルフなのではないか。だからゲンドウと対立し、止めようとするのではないか。ミサトがゲンドウを止めようとするのは、違う目的からかもしれない。それについては、次の項で考えてみたい。

さて、カヲルの刺した槍について触れておこう。カシウスの槍二本と入れ替わる前の、ロンギヌスの槍とカシウスの槍は、何を意味するのだろうか。ロンギヌスとカシウスは同じ人物を指しているが、ロンギヌスはキリスト教に改宗したあとの名前だ。キリストの血を浴びて目の病気が治り、それがきっかけで改宗したとされ、死後は列聖までされて



いる。この違いについて考えるには、「時」に触れなければならない。

ギリシャ語で「カイロス」と言われるものと、「クロノス」と言われるものがある。クロノスは通常の時間の流れ（時系列に沿った流れ）であり、カイロスはそれ以降、すべてが変わってしまう瞬間を指す。佐藤優は『新約聖書 II』の中で、日本人にとっての終戦記念日をカイロスの例に挙げている。それ以前には戻ることができず、戻ったように見えても何かが決定的に違う。そういう分岐点、あるいは転換点のようなものだ。今なら「3.11」だろうか。アメリカにとっての「9.11」、また冷戦の終結を告げた「ベルリンの壁崩壊」も、同様にカイロスだと言える。

イエス・キリストの登場もカイロスである。佐藤優によれば、「神のひとり子であるイエス・キリストが現れたことによって、歴史の意味が完全に変化したと考える」からだ（『新約聖書 II』11 ページ）。だからこそリリスにはカシウスの槍とロンギヌスの槍が刺さっており、それをシンジが抜くことで、何かが決定的に変わるはずだった。その決定的な変化を起こすために、カヲルはたびたび「時が来た」と言っていた。シンジが槍を抜くことが、カイロスだったのだ。

初号機が覚醒しかけたとき、カヲルはカシウスの槍を刺した。カイロスとなる変化が起きないためだ。リリスにカシウスの槍を刺したのは、来るべきカイロスに備え、変化を促進するためだった。だがロンギヌスの槍はカシウスの槍と入れ替えられ、変化は止まった。

ゼーレはアダムをエヴァンゲリオンの中に閉じ込め、覚醒をうながす。とらわれのアダムを解放するためだ。本来ゼーレが覚醒を託したのはカヲルだった。初号機覚醒の際、「ゼーレが黙っていない」と加持が言ったのはそのためだ。カヲルがカシウスの槍を刺したのも、初号機のアダムが覚醒するはずではなかったからだ。アダムとは第一の完全なアダム、すなわち救世主キリストだと以前の項で書いた。マニ教では、キリストは太陽と月に住処をもつとされる。旧劇場版で、太陽と月の重要性が語られていた。マニ教は太陽と月を崇める。旧劇場版で語られていたのは、マニ教的価値観だ。

カヲルはカインだと以前の項で述べたが、カインはセツ派の文書で太陽になぞらえられ、カヲルの乗る Mark06 は月で建造されていた。ここにも太陽と月の重要性が見られる。カヲルとシンジの乗る十三号機で、もう一度アダムが解放されるはずだったのではないか。だとすれば真のエヴァンゲリオンとはやはり、十三号機を指すのかもしれない。

カイロスが起これアダムが解放されるとき、カヲルとシンジは一体になって、天にのぼるとも考えられる。それはすなわち、至高神のもとへ還ることを意味する。そのためのダブルエントリーシステムだったのではないか。

「使徒とエヴァンゲリオン」の項で、カヲルもマリもアイオーン、つまり高次あるいは上位の霊（的存在）と述べた。二人は救済にどのような役割を果たすのか。そしてシンジとどうかかわっていくのか。今後の展開が気になるところだ。

## 今後の展望など（3） ミサトと父

セカンドインパクトが起きたとき、ミサトの父はミサトを脱出用カプセルに乗せて救った。ミサトは失語症に陥り、救助されたものの言葉を発しない生活が続いた。ふたたび話しはじめたとき、ミサトはこれまでの時間を取り戻すかのように喋りまくった、とりつこはテレビ版で言っている。失語症について、ミサト自身は何も語っておらず、言葉を取り戻すきっかけにも触れられていない。ミサト自身知らないのか、知っているけれど話したくないのか。

旧約聖書には神が人間に降（くだ）り、そのために人間が話せなくなる（言葉を失う）ケースが多い。それを見て人々は神の奇跡を知る。新約聖書でも、イエス復活のあと、サウロ（のちのパウロ）にイエスが降り、口がきけなくなる場面がある。このときの経験から、サウロはパウロとして、神の子イエスを信じ、その教えを広めるため尽力する。突然言葉を失うのは神がそうさせたから、という認識がある。神が人間をつくったからであり、人間に言葉を与えたのは神だからだ。バベルの塔の逸話では、人間が高い塔を建て神に近づこうとしたため、神は人間同士の言葉が通じないようにした。そのためお互いの言っていることが分からなくなり、建設は中止になった。それほど言葉は重要なものであり、神からの贈り物なのだ。ヨハネによる福音書にも、神、命、光という表現で、言葉の重要性が語られている（ヨハネ 1.1-4 の要旨）。

ミサトの中にも、神あるいは何か霊的なものが入っていたのだ。その霊が出たとき、ミサトは言葉を取り戻し、そしてネルフに入った。父の足跡を追うためだったかもしれないが、自分の過去を取り戻すためでもあっただろう。

使徒が襲ってくることは分かっていた。使徒をせん滅するための実戦兵器がエヴァンゲリオンだった。通常兵器はもちろん、核爆弾でも止められない使徒を、エヴァンゲリオンは消滅させた。エヴァンゲリオンとは何なのか。ネルフは何をしようとしているのか。ゼーレとは何なのか。ミサトの問いは、自然、自分の父が何をしていたかにも向けられる。新劇場版：破からQまでの十四年のあいだに、ミサトは本当のことを知ったに違いない。

ミサトの父はゼーレと契約を交わし、ミサトをゼーレにささげた。ゼーレはグノーシス主義の至高神であり、ミサトを使ってシナリオを成就させるのが目的だ。シナリオは、死海文書に拠って光と闇の戦いを起こし、最終的に光の子を勝たせること。そのためには、使徒とエヴァンゲリオンが必要だ。

だが死海文書に拠っているとはいえ、いささかの狂いもなく、計画通りに使徒が現れている。エヴァンゲリオンはゼーレの意志でつくられた。使徒もゼーレがつくったのではないか。ミサトの父が南極へミサトを連れていったのは、霊をミサトの身体へ入れるた

めであり、その霊とは、マニ教でアダムが囚われている闇の王国の勢力だったのではないか。

「使徒とエヴァンゲリオン」の項で、使徒は下位の霊アルコーン、エヴァンゲリオンは上位の霊アイオーンだと述べた。アダムは光の要素を発揮して闇を振り払う。闇は下位の存在であり、アルコーンだ。ゼーレの意を受けてミサトの父は南極へ赴き、アダムを解放した。その際、闇の王国のアルコーンが行き場を失った。ミサトの父はアルコーンをミサトの身体に入れ、ミサトとともに「救出」した。

ミサトが単に乗り物として使われた可能性は否定できない。乗り物であれば、ミサトのカプセルは「ノアの箱舟」である。闇の勢力、アルコーンは、箱舟によって生き永らえ、使徒という新たな生命を得たのではないか。だがテレビ版では、使徒の塩基配列が限りなく人間に近いとされていた。その設定が新劇場版にも引きつがれるなら、ミサトは単に使徒を運んだだけではないかもしれない。

ミサトは自分の父が人類と使徒の戦いにかかわっていたことを知り、自分も利用されたとはいえ、シンジたちを巻き込んだ責任を痛感しているのではないか。ゲンドウと刺し違える覚悟すら決めているかもしれない。しかし艦長と言えども、ヴンダーを使ってゲンドウを倒すことは認められないだろう。ヴィーレとミサトが敵対することも考えられる。そのときシンジは、アスカはどうするのだろうか。

ゲンドウとミサトの父について触れておこう。「黙示文学としてのエヴァンゲリオン新劇場版」の項で述べたように、ミサトの父とゲンドウはともに幻視者だ。神にとられたエノクがそうであったように、ミサトの父もゲンドウも、終末に何が待ち受けているかを知った。終末が訪れたとき救済を得られるよう、ミサトの父は、ゲンドウに何かを託したかもしれない。

ゲンドウはみずから「闇」となり、シンジの前に立ちはだかるのではないか。それは光の子と闇の子の戦いが実現されるためであり、シンジにとってゲンドウが乗り越えるべき存在であるからだ。ミサトにとっても同じはずだ。父の背中を追いかけてきたミサトは、父を乗り越えなければ、過去を取り戻すことも、過去と決別することもできないに違いない。父と子の相克において、そして救済において、ミサトは重要な役割を担っているのではないだろうか。

## まとめ。ファンタジーとしての『エヴァンゲリオン』

新劇場版：Qの予告で、次の作品は「シン・エヴァンゲリオン」と明らかにされた。シンとはシンジだろう。エヴァンゲリオンは、テレビ版『新世紀エヴァンゲリオン』の表

記に戻った。やはり、テレビ版・旧劇場版から新劇場版を通じて、ずっと同じテーマを扱っているのだ。

『エヴァンゲリオン』の大きなテーマのひとつは、善と悪だ。モチーフとされるのは旧新約聖書のほか、マニ教に代表される東方グノーシス主義の善悪二元論と、マニ教が（その中の巨人の書を）正典として採用したエノク書、エノク書の写本を含む死海文書だ。グノーシス主義ヴァレンティノス派、セツ派の流出説により善から悪が流出し、最終的にはすべて大いなる善、至高なる神のもとへ還る。マニ教でもやはり善と悪の戦いがあり、最後にはすべて善に取れんされる。

現代はグノーシス的時代である、と大貫隆は言う（『グノーシスの神話』岩波書店）。著書の中で新霊性運動のひとつ、ニューエイジ運動をとりあげ、グノーシス主義との比較を試みている。

グノーシス主義は世界拒否であり、自分が生きている世の中を否定するものだ。ニューエイジ運動は調和的な世界を前提とし、世界を拒否してはいない。しかし人間が本来善であり、神のかけらを持つと考えることで日常の意味を変化させた。その点で両者は似通っている。ニューエイジ運動をベースとしてグノーシス主義の世界拒否を取り入れ、今ある世界を否定しつつ、新しい世界をつくる。それがNEON GENESISとして、テレビ版『新世紀エヴァンゲリオン』が目指したところだったのではないか。

善悪の戦いがテーマという点、ファンタジーが思い浮かぶ。アーシュラ・K・ル＝グウィンはその著書、『いまファンタジーにできること』の中で、ファンタジーは一般に善悪の戦いを書くものとされる、と述べている。ル＝グウィンによれば、一般的にファンタジーと思われる作品には、まず白人が登場し、彼らは中世を思わせる時代に生きていて、そこでは善と悪の戦いが繰り広げられている。そして善が勝利をおさめることで、神学的な悪の問題は解決し、この世は平和で秩序立った世界になる、と。

神学的な悪の問題とは、全能の慈しみ深い神がつくった世界になぜ悪が存在するのか、というもので、グノーシス主義は一時的にせよ、この神学論争に終止符を打った。この世界に悪が存在するのは、世界をつくったのが愚かな創造神だからだ、と主張することで、悪が存在する理由を明確に示したのだ。

エヴァンゲリオンの物語は一般的にファンタジーとされる作品のルールに、完全に則っているとはいえないまでも、それを踏まえた作りになっている。その根幹にグノーシス主義を置き、悪の問題に答えを用意した。主なストーリーは極東の島国、日本で展開し、登場人物もほとんどが日本人。白人が登場するのがファンタジー、という固定観念を打ち破った。時代は現代・近未来だが、終末と救済を描いている点で、たしかに中世を意識させられる。

ル＝グウィンはしかし、「本当のファンタジー」とは善悪の戦いを描くものではない、と言う。善とは何か、悪とは何か、それについて考えることのできる作品が、本当の意味でのファンタジー作品なのだ、と。

この点においても、エヴァンゲリオンの物語は十分にファンタジーの条件を満たしている。テレビ版では、善と悪、あるいは敵と味方がある程度分かりやすくなっていたが、新劇場版では善と悪は完全に相対化され、明確になっていない。見る側は自分の力で、誰が善で誰が悪なのか、善とは、悪とはいったい何なのか、考えることを要求される。西

洋にはキリスト教と、それにもとづく黙示文学・ファンタジーの伝統があり、その伝統にのっとった形で、『エヴァンゲリオン』の物語は進んでいるのだ。

もうひとつのテーマは、愛と信頼だ。ことにカヲルは、愛と信頼にもとづいて行動する。愛にはさまざまな形がある。親子・きょうだいのお愛、友達同士の愛、男女の愛。イエス・キリストが愛により人類を救ったキリスト教は、愛の宗教と言われる。愛と信頼は、人間が生きて行くうえで欠かせない。宗教の枠組みで言えば、信頼は神に対するものであり、信仰と言い換えることができる。しかし人間同士のあいだでも、信頼はこのうえなく重要だ。

冷戦体制の崩壊、米同時多発テロ「9.11」、東日本大震災「3.11」と、激変する世界において、テレビ版から旧劇場版、新劇場版へと、『エヴァンゲリオン』の物語は時代の要請で製作・放送／公開され、世界中で受け入れられた。混迷の時代にはいつも、人間は救済となる福音を求めてきた。「9.11」と「3.11」を経た今、愛と信頼の重要性はかつてないほどに増している。

「シン・エヴァンゲリオン」のタイトルは、選択がシンジにゆだねられていると明確に示した。私見だが、次回作のサブタイトルは“You can (not) change the world.”（あるいはremake, recreateなど。いずれも「(きみが望むなら) きみは世界を変えられる／再生できる／再創造できる」)ではないだろうか。

旧劇場版でリリースにすべて吸収されかけたとき、シンジは選べると告げられた。どうなりたいのか、どういう世界に生きていきたいのか、自分で選ぶことができる、と。その結果シンジは、アスカと荒廃した世界に残ることを選んだ。元に戻ることも選べたのに、あえてアスカと二人、ゼロからやり直す選択をしたのだ。新劇場版では、どのような展開になるのだろう。次の作品が公開されるまで、あれこれ想像を楽しむことにしたい。この物語が、すべての人にとっての「福音」であることを信じて――。

## 参考文献

青木健『マニ教』講談社（2010年）

荒井献編『新約聖書外典』講談社（1997年）

荒井献『トマスによる福音書』講談社（1994年）

荒井献大貫隆責任編集『ナグ・ハマディ文書 チャコス文書グノーシスの変容』岩波書店（2010年）

大貫隆訳・著『グノーシスの神話』岩波書店（2011年）

ロドルフ・カッセル マービン・マイヤー グレゴール・ウルストバート・D・アーマン編

## 著

- 藤井留美 田辺喜久子 村田綾子 花田知恵金子周介 関利枝子訳  
『原典ユダの福音書』日経ナショナルジオグラフィック社（2006年）  
共同訳聖書実行委員会／日本聖書協会訳『聖書 旧約聖書続編つき』（1987年）  
共同訳聖書実行委員会／日本聖書協会訳佐藤優解説『新約聖書 I』文芸春秋（2010年）  
共同訳聖書実行委員会／日本聖書協会訳佐藤優解説『新約聖書 II』文芸春秋（2010年）  
アーシュラ・K・ル＝グウィン著谷垣暁美訳『いまファンタジーにできること』河出書房新社（2011年）  
ロラン・ゲッチェル著 田中義廣訳『カバラ』白水社（1999年）  
アンドリュー・サミュエルズ バーニー・ショーターフレッド・プラウト著 山中康裕監修 濱野清志・垂谷茂弘訳  
『ユング心理学辞典』創元社（1993年）  
柴田有『グノーシスと古代宇宙論』勁草書房（1982年）  
関根正雄編『旧約聖書外典 上』講談社（1998年）  
関根正雄編『旧約聖書外典 下』講談社（1999年）  
ベン・ソロモン『死海文書の封印を解く』河出書房新社（1998年）  
筒井賢治『グノーシス』講談社（2004年）  
箱崎総一『カバラユダヤ神秘思想の系譜』青土社（1986年）  
エレヌ・ペイゲルス著荒井献／湯本和子訳  
『ナグ・ハマディ写本初期キリスト教の正統と異端』白水社（1982年）  
エレヌ・ペイゲルス著 松田和也訳『禁じられた福音書ナグ・ハマディ文書の解明』青土社（2005年）  
マービン・マイヤーエスター・A・デ・ブール著 藤井留美 村田綾子訳『イエスが愛した聖女マグダラのマリア』  
日経ナショナルジオグラフィック社（2006年）  
森瀬繚『「天使」がわかる』ソフトバンククリエイティブ（2009年）  
森瀬繚 坂東真紅郎海法紀光『「墮天使」がわかる』ソフトバンククリエイティブ（2008年）  
和田幹男『死海文書 聖書誕生の謎』KKベストセラーズ（2010年）  
#その他、インターネット上で Wikipedia、モバイル Wikipedia、はてなブックマーク、またカバラ・グノーシスなど関連サイトを参考にしました。

## おわりに

エヴァンゲリオン新劇場版：破からQまでのあいだに、テレビ版と旧劇場版をDVDで見たあと、テレビ放送された新劇場版：序と破を見て、それからQを見ました。そのあともう一度「破」のDVDを見て、二十冊以上の本を読み、またインターネットのサイト検索で情報を得て、ようやく書き終わりました。「ネタバレしない程度に～」を書いてから、およそ四ヶ月。

書き始めたときは、短時間で出来ると思っていました。新劇場版：Qのことだけ書くつもりが、終わってみたら全体的な話になっており、そうなった以上、長い時間かかるのは必然だったのかもしれませんが。そもそも短時間で終わると思ったのが間違い、ということもあるのですが（汗）。評論のような体裁になってはいますが、見て感じたことを書いた、「ただの感想（+α）」。そう思っただけなら嬉しいです。

書いていくにつれ、そうか、だからこう言ってたんだ、など、最初に感じていたことがどんどん広がっていく経験をして、エヴァってすごい！面白い！とあらためて実感し、黙示文学だとかファンタジーだとか、そんな風に考えるようにもなりました。その論証のために、いろいろな本から引用させていただきました。その本が全体として言っていることを、できるかぎり損なわないよう努めたつもりですが、我田引水、強引になってしまっていたら申し訳ありません。

今後の展望も含め、本当に勝手な推測ですが、こういう解釈が成り立つのではないか、その場合こんな展開もあるのではないか、など、一度そう思ったら、書かずにはいられませんでした。私自身、作品の素晴らしさを再発見して、感動を少しでも伝えることができればと、ただただ、その一心で書いたものです。ここに書いたことが、作品を楽しむための一助になれば幸いです。

最後まで読んでくださり、本当にありがとうございました。

2013年3月18日（2015年3月12日修正このページ以外に修正箇所はありません）

比良岡美紀

---

ネタバレ注意！エヴァ新劇場版Q ～福音～

---

版番号の予定

{{-  
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo  
発行所 デザインエッグ株式会社

---